

ひと呼吸

#5 Sakai Haruna.

私たちの日常。それは多くの営みの連なりである。普段、それぞれの行為の意味を考えることは少ないが、ふと立ち止まって考えてみれば、そこには偶然と必然が潜んでいることに気づく。
呼吸。そのような自然な行為ですら、太古における偶然と必然の産物であつたといえるかもしれない。この「ひと呼吸」が、手に取った人の日々の呼吸（営み）を見つめ直すきっかけとなり、そして、それぞれの日常のなかでの「ひと呼吸（休息と起點）」になれば嬉しい。

いう思い込みに對して、いやいや違うよと言ったかったのかな。そんな感じで接していると、ちょっと何というか、学生にとつて決して甘えられる存在ではなかつたでしょうね。

木谷 結局は自分で立っていくしかないという現実があるわけですからね。周りに優しくされたところで何も解決しないということを

酒井 そうですね。それから私のなかの根本は、障害者の運動とか権利というものからもすごく影響を受けてるので、学生にもセルフアドボカシーということに繋がる何かを伝えたいという想いがあるんだと思います。

木谷 でも、様々な障害のある学生がいるなかで、自身の障害のことを考へるって、そんなに簡単なことでも、生易しいことでもないですよね、きっと。

酒井 確かに人によつてはそれができないこともあります。それに障害について考へるつて正直しんどいし、行動しても何も環境が変わらないかもしない。守られて傷つかないようにならぬ人生もそれはそれで幸せかなとも思います。そういうことを考へ出すと、何が正解なのかって悩みますね。でもやっぱり障害があるということで、ある種ちょっと闘わなきやいけないことも社会に出ればあると思う。学生に無理やり闘えとは言わないけど、例えば障害者運動の歴史のなかで制度や環境が整つてきたことをまずは知つてみると、実は大事なのかなと思います。

改めて、権利というものを考へる
頭のなかが整理されました。

1 東俊裕

DPI日本会議
熊本学園大学社会福祉学部社会福祉学科教授／弁護士
内閣府障がい者制度改革推進会議担当室室長（2009年～2012年）

2 DPI日本会議
熊本学園大学社会福祉学部社会福祉学科教授／弁護士
内閣府障がい者制度改革推進会議担当室室長（2009年～2012年）

3 平野みどり

DPI日本会議議長／元熊本県議会議員
障害者自立支援センター「ヒューマンネットワーク・熊本」設立981年に世界会議が行われ、1986年に日本でも発足。

4 ADA法（Americans with Disabilities Act of 1990）

東京アドヴォカシー法律事務所所長／弁護士
内閣府障がい者制度改革推進会議差別禁止部会部会員（2009年～2012年）、日本弁護士連合会人権擁護委員会障がいのある人に対する差別を禁止する法律に関する特別部会委員。

5 池原毅和

東京アドヴォカシー法律事務所所長／弁護士
内閣府障がい者制度改革推進会議差別禁止部会部会員（2009年～2012年）、日本弁護士連合会人権擁護委員会障がいのある人に対する差別を禁止する法律に関する特別部会委員。

6 障害のある人もない人共に生きる熊本づくり条例
熊本県で2011年から全面施行された条例。



いくというものではない。そこには関係して思い出したんですけど、私がこの仕事を始めた頃にちょうど熊本で差別禁止条例をつくるという動きが盛り上がりつたんですよ。障害者団体が集まって団結して、それが変わつていくような、そんなワクワクした感じがありました。ちょうど国連の障害者差別禁止条約が成立して、その後、障害者がが変わつていくような、そんなワクワクした感じがありました。でも、あれあれ？ つてなつていくんです。

木谷 もう少し具体的に、どういう感じだったんですか。

酒井 特に私は当事者として、法律によつて自分の生活とか環境が大きく変わつていくんだと思つていたんです。でもそうはならなかつた。変わつていつたのはむしろ自分自身の生活環境ではなくて、支援者としての仕事の方、つまり障害学生支援の仕事の方でした。

体制整備の研修が増えて、学内でも合理的配慮という言葉が聞かれるようになって、変わつていくのを感じました。例えば今まで何も言つてこなかつたような先生たちから、差別解消法ができたからしないといんだろうというようなことで問い合わせが増えたり。一方で当事者の友人と話しても、実際に、スロープ付きのバスの本数も増えないし、あまり変わつていないよね、みたいな話になります。

木谷 当事者としてどこか期待が裏切られた感じがあつたのと、それだけではなく支援者としても何か違和感があつた。

酒井 そうですね。障害学生支援の具体的な話をすると、例えば今まで自然にできていたことがわざわざ制度に則つてやらなきやいけないというような発想、感覚になつてしまつた部分もあると思います。法律がなかつたときは、確かに先生たちに理解してもらうのに

すごく苦労はしたんだけど、でもその反面、配慮ができないという現実になつてきました。

もちろん以前が良かったというわけでもないけれど、実際にこの法律が学生のものになつた感じがありました。ちようど国連の障害者差別禁止条約が施行され何かが変わつていくよな期待感がありました。でも、あれあれ？ つてなつていくんです。

木谷 なるほど、それで三度目のアメリカを目指すんですね。

酒井 そう、それで日本財團の研修があるとこう思つたんです。何かヒントになることがほしくて。

木谷 なるほど、それで三度目のアメリカを上がるもののがくるのかなと思つていたら、上がら覆いかぶさるようなことになつていって、そこが何かちょっと不思議な感じでした。そ

ういうことがあつて、もう一回アメリカに行こうと思つたんです。何かヒントになることがあります。

木谷 それでも、行かれましたね。諦めなかつたんですね。

酒井 地震が起きた半年後に行きました。それでも行つて良かつたと思っていました。やっぱり違うんです。ボストンの大学に行つて障害学生支援の現場を見たんですが、大学もボリシーを掲げてコンプライアンスとして当然のように障害学生支援室を置いているし、スタッフがスペシャリストとして位置付けられている。自分が日本から抱えてきた疑問や悩

みが滑稽なぐらい、もう当たり前のようにやつていて。障害のある人に対する姿勢といふのも確立されている。やっぱり権利なんですよ。障害者が生きていくため、学ぶために支援や配慮をしてもらうことは、それで改めて

そんなに制限してしまふのかなつて。障害があるからできないとか、結婚して子育てしている私は特別だつて言われたりする。障害者自身がある意味、障害のある自分を差別するというか、偏見持つてるというか。そんな風にも思つてしまします。もちろん出産や子育ては大変だし、実際に障害のある人が子どもを産むと子どもがかわいそうとか、どうやって誰が育てるのみたまなことを世間から言われます。でもいろんな制度や支援があるし、人にも手伝つてもらつて子は育てられています。夫婦だけで子育てする必要はないし、いろんな家族のあり方があつていいと思います。みんなで子育てやればいいんだからって。

木谷 そうですね。どんな方法、かたちばかりいいはずです。

酒井 私の周りには障害のある人がたくさんいますけど、結婚している人、そして子どもがいる人はあまり多くありません。だから私も子どもを産んで育てていくなかで、障害があることで困つていることをなかなか周りに聞くことができなくて、お腹が大きくなるけどこのまままで大丈夫夫なのかとか、車に子どもを乗せるときもどうやってチャイルドシートに乗せねばいいのかとか、わからないことばかりでした。子育て情報誌はたくさんありますけど、車いすの人は出てこないから。

木谷 そうか。身近にロールモードルがあることつてすごい大事だと思いますけど、それがほんとうに少ないわけですね。

酒井 そうなんです。だからいま、特に子育てについて誰かの役に立つ情報を発信できるらしいなつて、ひそかに考えています。

木谷 そういう話をもつとしていきたいです。よね。そして私たちもそうやってどんどんやりたいことをやつていただきたいですね。

酒井 そうですね。結局は勉強も仕事も子育ても、やりたいことをどんどんやりたいなつて思つてます。

Editor's Note

インタビューの最後で、女性としてや母としての話になりました。恋愛ができない、親になれない、そんな思い込みが障害学生にあるといいいます。何ともいえない鈍い重たいものを感じます。だからこそ、そうした現状に何かできないかと思っているという酒井さんのお話には、「ぜひ！」と即答してしまいました。そういえば最近、上野千鶴子さんの東京大学入学式の祝辞が話題になりましたが、そこで話されていたのは、幼い頃からの女性に対する「aspiration」のcooling down（意欲の冷却効果）。障害者にも通じる話だと思います。障害があることでも気付かぬうちに諦めている（あるいは諦めさせられている）ことがたくさんあると想像します。

ところでまったく個人的な話になってしまいますが、立命館大学は私が初めて障害学生支援の仕事を始めた職場でした。熱い想いをもった教職員の方々にはずいぶん刺激をもらい、育てていただきました。めぐりめぐって、そこにまた酒井さんを訪ねて行くことができ、懐かしく嬉しかったです。酒井さんのこれからの挑戦、心から応援したいと思います。

（木谷恵）

Concept

障害のある学生が高等教育にアクセスする権利を保障するための取り組みである「障害学生支援」には、その主人公である学生と対話し、ともに行動してきた多くの実践者たちの存在があります。こうした実践者一人ひとりには独自のバックグラウンドがあり、またそれぞれの考え方や想いをもって形作ってきた歴史があります。

私たちは、これらの「人」によって蓄積してきた考え方やその想いを知ることが、これから障害学生支援を考えていく上で貴重な機会となり、この分野の魅力を知ることにつながると考え、この『ひと呼吸』を発行することにしました。ここに綴られているのは、私たちを含めた一人ひとりの関係者にむけた応援のメッセージです。

ひと呼吸・編集委員会（HEAP×Kyoto Univ.DSO）

村田淳、船越高樹、宮谷祐史、木谷恵

HEAP：高等教育アクセシビリティプラットフォーム

Kyoto Univ.DSO：京都大学 学生総合支援センター 障害学生支援ルーム

発行／高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）

Address 京都市左京区吉田本町

京都大学学生総合支援センター内

Web <https://www.gssc.kyoto-u.ac.jp/platform/>

Mail d-support-pfm@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

Tel 075-753-5707